



長谷川さんの母・優子さんが組み上がった面金を点検する。長年の経験から、長谷川さんが見逃してしまった歪みや曲がりまで見抜くそうだ



台座と横ひごの接合部分の一つずつかきしめる作業



縦金と横ひごの接合部分もかきしめていく

今回も真和工業株式会社の面金づくりを紹介する。前号では面金を組み立てるところまでを見た。それを点検し、微調整するのは熟練を要する作業だという。

「この曲がりを直すのが大変なんです。私もだいたいできるようになったけど、まだおふくろの職人技にはかなわない」

と代表取締役の長谷川暢彦さんが言う。

続いて、接合部をかきしめる作業。「かきしめる」とは、金属の接合部を変形させて固定すること。台輪と横ひごの接合部、縦金と横ひごの接合部を一つひとつ機械でかきしめていく。前号で紹介したように横ひごの太さは全部同じではないので、それに合わせて機械を調整しながら行なう。

これで面金としての形ができたが、まだ完成ではない。前々回紹介した鏡面研磨を行ない、一度洗ってから焼き付け塗装を行なう。

日本でつくる 剣道具

— 剣道具の製造工程、すべて見せます

第10回 面金は折れずに曲がるものである

撮影=窪田正仁

面金が工場内の高いところに無数に並んで吊るされているのは、この焼付け塗装のためだった。

「これ、少しずつ動いているのに気づきましたか？」と同行した川辺さんが言う。確かにじつと見ているとわずかに動いている。動き出した面金はまず釜の中に入っていく。180度の温度で25分焼いて塗装をするそうだ。釜から出てきた面金は乾燥させるためにまだ

しばらく吊るされて工場を一巡りするという仕組みだ。

それが終わると、さらに裏面塗装を施してようやく完成となる。

**曲がることで人体を守る
曲がったら必ず交換を**

最後に大切な面金の強度のことに触れたい。剣道をする人の多くは、面金は曲がったりす

案内人
川辺尚彦

(株)全日本武道具、
(株)日本剣道具製作所代表取締役



ることはないもので、曲がるのは不良品だと考えているのではないだろうか。しかし、力の加わり方によっては曲がってしまうこともあるのだと長谷川さんは言う。

「買って一週間もしないうちに曲がったというクレームをいただいたこともあります。でも、面金は折れるよりも曲がるような強度設定になっているんです。今よりも硬くすれば同じ状況でパキッと折れてしまい、折れれば必ず事故につながります。折れないで曲がれば、竹刀はそこで止まるわけです」

つまり曲がることで事故を防げるということだ。その発想は使う側にはまずないだろうが、言われてみれば確かにその通りである。「でも一回で曲がるようなことはまずないでしょう?」と川辺さんが聞くと、

「よく言われるのは、突かれたときに横ひごの一本だけを突かれると曲がるということですが、確率的には非常に低いけれど、相手が顎を出して上を向いて行ったところから引っかかってしまえば、一回でも曲がりますね」



7月号で紹介した鏡面研磨の作業。
これは一つずつ手作業でやっていかなければできない

と長谷川さんは答える。
面金が曲がったらどうするか。元に戻して
使っている人がいるが、もう一度その部分に
力が加わればかなりの確率で折れるので、そ
れは絶対やめてほしいと長谷川さんは注意を
促す。
「面金が曲がったら、うちとしては『残念です
が、折れなくてよかったですね』というのが精
一杯なんです。とにかく交換して下さいとし
か言いようがありません。可能な場合は『新し
い面金を差し上げますので、その曲がった面
金を勉強のために戻してもらえませんか』と
言います。人がケガをしないこと、ましてや
命を奪われたりしないこと、まずそれが一番
です。面金や防具が壊れても『申し訳ありま
せんでした。直させていただけます』で済み
ますが、ケガをしてしまえば治らないかもし
れない。とくに面金の場合は顔を守るもので



右上の金属の箱のようなものが、焼付
け塗装のための釜。この中を15分ほど
かけて面金が移動する

すから、目を痛めたりすれば取り返しがつき
ません。一回で曲がったらユーザーの方が怒
るのも当然だと思いますが、人間の体を守る
ためにそういう設定になっているんです」
つくる側としてもそこが一番難しいところ
だという。どんな衝撃を受けても折れも曲が
りもしない材質は存在しない、あるいはあつ
ても重すぎたり高価すぎて面には使えない。
長谷川さんによればラクロスというスポーツ

競技に使うラクロススティック（鉄の丸棒の
先にボールをとらえるカゴのような物がつい
ている）には、シャフトの部分が「曲がったら
絶対に使用しないで下さい」と書いてあるそ
うだ。剣道の面金にもそういうことが必要な
のかもしれない。
10年以上前のこと、いわゆるブラック面金
が市場に出回ったが、やがて全日本剣道連盟
によって使用が禁じられた。他社製のものも



前回紹介したように、取材に同行した
全日本剣道具の俣野公栄さんが面金づ
くりを体験したが、最初に行なったのは
台輪になる部分に好きな文字を彫る作
業だった。長谷川さんは、「引退したら、
子どもたちにアドバイスしながら面金づ
くり作業を体験させてみたい」と話す



面金をつくり続けてきた長谷川家三代。創業者である治司さん、暢
彦さん。碩亮（ひろあき）君は高校で剣道部に所属している

あったが、真和工業の製品は面金に傷がつか
ないようにカーボンをコーティングした結果
黒くなったもので、表面の硬度は一般の面金
の100倍もあったそう。安全性がより高
い製品が、見かけの問題で禁止されるという
のはつくる側にとっては悔しいことだったよ
うだ。剣道の世界では、見えるところが進化
するのは受け入れられにくいという難しさがある。
しかし、というか、だからこそと言うべき
か、面金は見えない部分、見えにくい部分で
進化してきている。そのことは使う側もぜひ
知っておくべきだろう。真和工業を訪ねた3
回に渡る記事で、面金が進化してきたことが
少しでも伝わったことを願う。
「研究しながら成長して今の面金というのが
あるんです。20年前30年前の面金よりは全然
進化しているということですね」（川辺さん）